

山形県におけるクロザコエビ属の漁獲状況

忠 鉢 孝 明

(山形県水産試験場)

1 漁獲量の推移

山形県におけるArgis属エビ類（「ガサエビ」）漁獲量は、従来の漁獲統計上ではエビジャコ類を含めて「その他のエビ類」として一括されており、これらの1977年からの漁獲量の推移は図1に示すとおりである。

往時の底びき網漁法では、魚類を対象とした底びき網漁法の混獲物として漁獲されていたが、新潟県からホッコクアカエビ曳漁法が導入された1985年を境として、ホッコクアカエビ及びその他のエビ類の漁獲量に大幅な増加がみられたが、最近5ヶ年のその他のエビ類の漁獲量は50トン前後で比較的安定している。

県漁協の販売データを水試独自に集計可能となった1989年10月以降ではトゲザコエビを主体としたArgis属漁獲量を「ガサエビ」、エビジャコ類を主体とした「クロエビ」の2種に分離して漁獲統計を作成している。

本県におけるガサエビ漁獲量の5割以上が水揚げされる鼠ヶ関港を代表港とした1989年10月からの月別・魚種別エビ類漁獲状況は、例

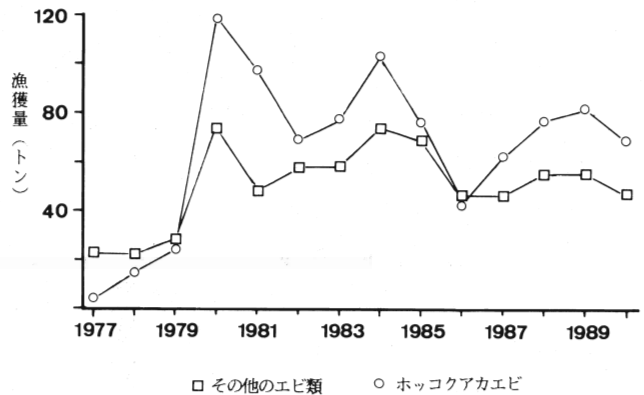


図1 山形県におけるエビ類漁獲量の推移

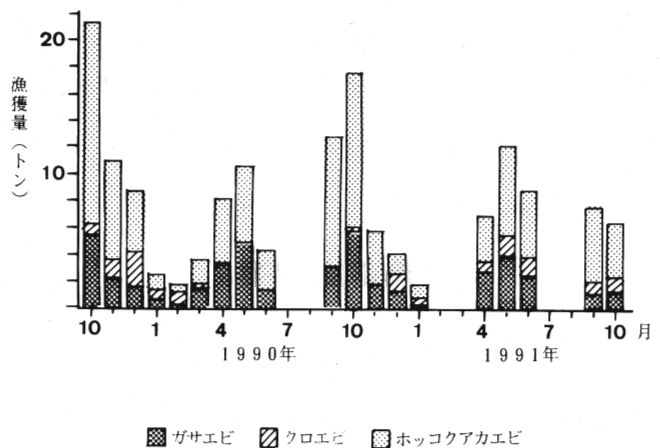


図2 鼠ヶ関港におけるエビ類漁獲量の推移 (底びき網漁業)

年4, 5月の春期及び9, 10月の秋期に2回の漁獲ピークがみられるが, ガサエビの占める比率は春期が高くなっている(図2). これは, ホッコクアカエビ標本船調査結果(図3)によると, 当業船はホッコクアカエビ抱卵個体が多く分布する水深帯を狙って, 春期には水深550m前後の深所, 秋期にはそれより浅い水深400m台を中心それぞれ操作を行っているため, 両種の時期的な分布状況が反映したと思われる. 同様に, ガサエビの銘柄別漁獲量の推移(図4)では, 11月から翌年2月までの冬期には, ホッコクアカエビ抱卵個体の移動を追って操作するため, 水深帯が浅くなるにつれて漁獲量が減少する傾向がみられた.

また, ガサエビの主分布水深帯の中でも比較的浅所的水深400m台で操作する秋期に「大」銘柄(抱卵個体が主)の漁獲比率が高い傾向となっている.

2 漁獲物の頭胸甲長(C L)組成

1990年11, 12月に試験船(最上丸136.49トン)を用いて加茂港沖合で水深250から600mまでの水深帯別に行った底びき網(1そう曳かけ回し)による試験操作時に漁獲されたトゲザコエビのCL組成を図5に示した. CLの出現範囲は12mmから33mmで, 12月の水深帯別組成によると, 水深600mではCL19mm前後に1つのモードがあるのに対して, 水深400mではCL17mmと27mmの2つのモードがあり, 他の水深帯に比べ大型の個体が多く出現している. 抱卵個体はCL24mmから31mmの範囲で出現し, 水深400mに最も多く出現している.

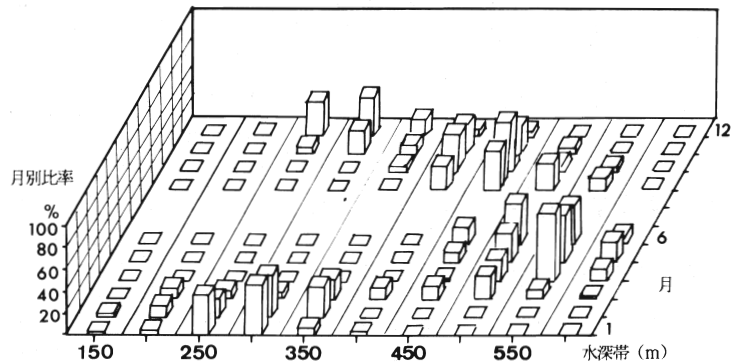


図3 ホッコクアカエビ標本船調査による曳網水深帯の月別比率(1986~1989年の平均値)

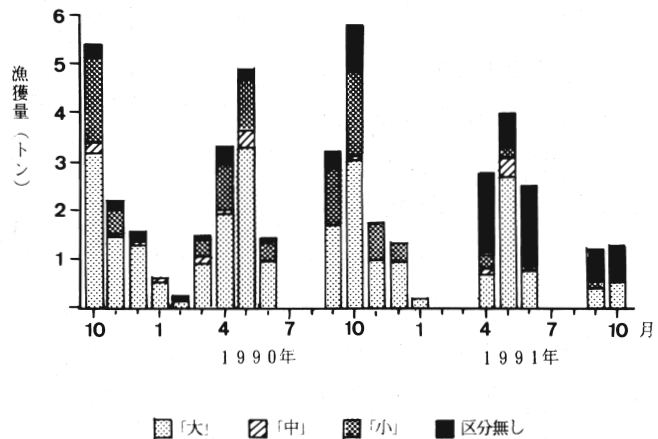


図4 鼠ヶ関港におけるガサエビの銘柄別漁獲量の推移(底びき網漁業)

1990年11月

1990年12月

■ 包卵固体
 □ 無包卵固体

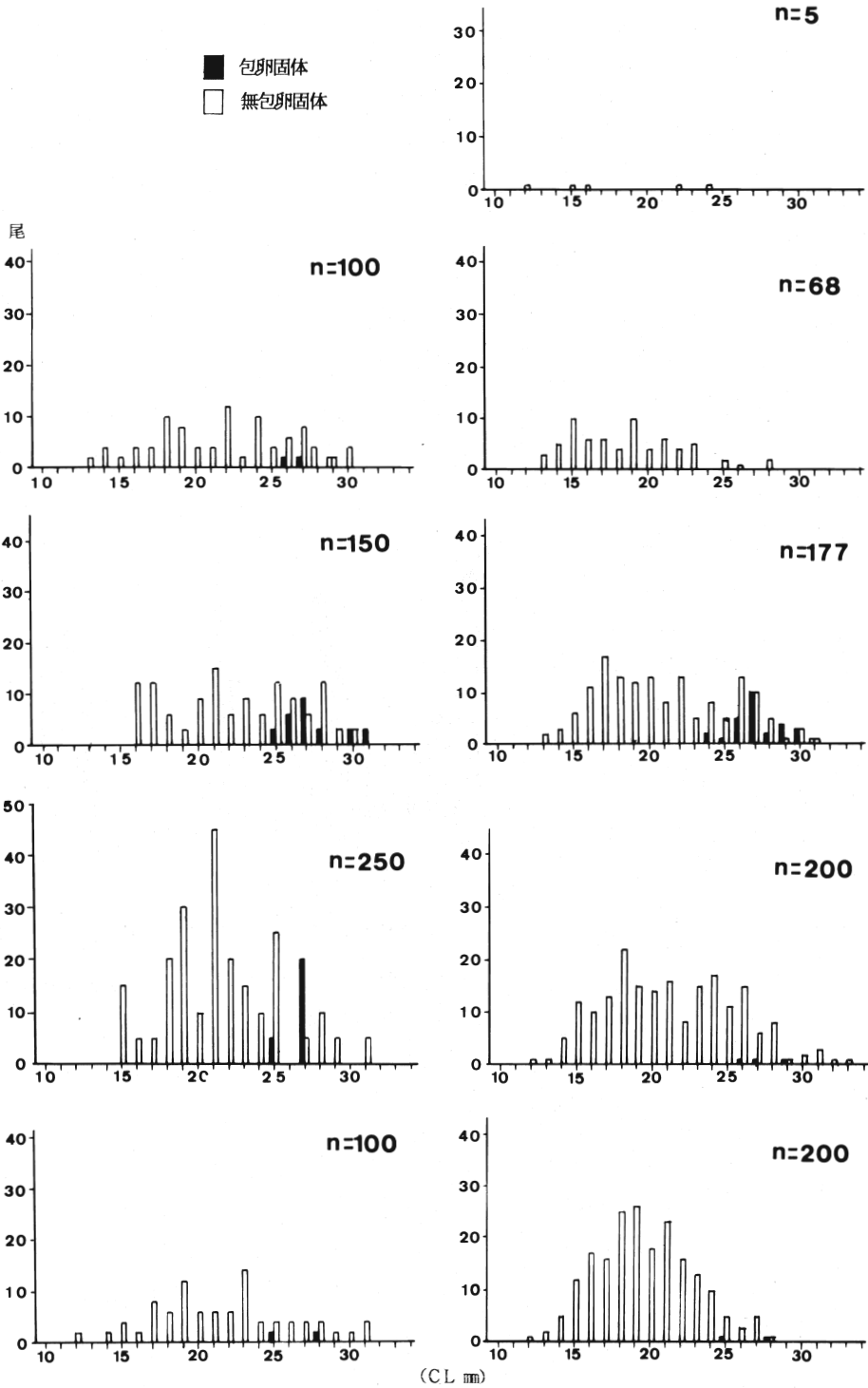


図5 トゲザコエビの時期別・水深別分布状況(最上丸)

